

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 052

(2022/23年度 USDA米国農務省 11月9日発表)

[ハイライト]

① 世界穀物生産量はこの20年間で1.5倍/27.5億トとなったが需給関係は逼迫、この先は…

この2000年以降の20年間の穀物需給動向を俯瞰すると、途上国の人口増/経済発展等を背景に穀物生産量（小麦/コーン/米）はGMO種子普及や機械化進展のなかで18.5億ト⇒27.5億トと+9億ト（1.5倍）増大したが、期末在庫率は17年の30%超から現在27.5%と需給逼迫が進んでいる。且つ、市場性が無く世界穀物在庫の約6割（4.7/7.6億ト）を占有する中国の数量を除けば期末在庫率は何と10%と危うい状況となる。また、価格ベースはこの20年で凡そ2倍に上昇。この先、人口急増（11/15には80億人）や気候変動/燃料/肥料高騰等の要因も踏まえ穀物需給と価格動向を見据えていく必要がある。

② ブラジルの今年度大豆/コーン生産量は飛躍的に拡大、輸出量は米国と並ぶ約1.4億トに迫る

ブラジルの今年度大豆/コーンの生産拡大と輸出増加は目覚ましい。同国の2000年比大豆/コーン生産量は大豆40⇒152百万ト/コーン34⇒126百万ト。輸出量は大豆15⇒89.5百万ト/コーン0⇒47百万ト。この間の飛躍は数字の通りだが、今年度の両品目合計生産量は278百万ト、輸出量は136.5百万ト。輸出量はほぼ米国と並んだ。今後BRAはセラード開発等同じ穀物生産拡大の可能性が大だが、その為の資金確保/機械化/技術普及/道路/港湾等のインフラ整備等の進展が注目される。

③ ウクライナは黒海穀物回廊経由で10月末まで約1,000万ト積み出し、11/19期限の回廊延長合意

7月末合意したUKRの黒海回廊はこの8-10月の3か月間で422隻/約1,000万トの穀物積み出された。しかし、ロシアは合意履行を10/29突然停止すると表明し11/2これを撤回、その後自国産穀物/肥料の輸出促進を盛り込み、120日間自動延長で17日合意した。一方、UKRの今年度小麦/コーンの生産/輸出見通しは需給表の通り前年比6割程度と変化がない。

1、世界穀物需給の概要（大豆を除く）

① 生産量：	2,747百万ト	（前年比1.5%	減↓	、	前月比0.3%	減↓
② 消費量：	2,775百万ト	（前年比0.8%	減↓	、	前月比0.3%	減↓
③ 貿易量：	487百万ト	（前年比3.9%	減↓	、	前月比0.3%	減↓

2、とうもろこし

① 生産量：	1,169百万ト	（前年比4.0%	減↓	、	前月比0.3%	減↓
② 消費量：	1,175百万ト	（前年比2.4%	減↓	、	前月比0.5%	減↓
③ 貿易量：	181百万ト	（前年比9.8%	減↓	、	前月比0.3%	減↓

④ 概況：世界生産量は、早魃等の為前年比米国/EU/UKRが大幅減産、南米BRA/ARGの増産はあるが全体的には豊作だった前年12.1億トから約4千万トの減産が確定的である。消費量も同様な傾向で12億トを下回り、貿易量は昨年2億トから10%近く減少する見通しとなった。全体縮小の最大要因は米国生産量が前年383⇒354、輸出63⇒55百万ト減少したことが大きい。期末在庫は300百万ト/在庫率25.6%と変わらず。うち中国206百万トと世界シェア69%。

⑤ 価格：\$6.81/Bu（前年\$5.54/Bu / 前月\$6.83/Bu）と前月比\$0.02 下落。

3、小麦

① 生産量：	782百万ト	（前年比0.2%	増↑	、	前月比0.3%	減↓
② 消費量：	790百万ト	（前年比0.5%	減↓	、	前月比0.1%	減↓
③ 貿易量：	208百万ト	（前年比2.7%	増↑	、	前月比0.3%	減↓

④ 概況：世界生産量は、乾燥によるARGの減少はあるが、豪州は史上最高の35百万トと2年連続の大豊作となり全体でも8億トに迫る勢いである。消費量は前年より微減だが全体的には底上げされ堅調。貿易量はアジア/アフリカで拡大続き2億ト越え。期末在庫は268百万ト/在庫率33.9%と変動なし。うち中国144百万トと変わらず世界シェア54%。

⑤ 価格：\$8.48/Bu（前年\$7.67/Bu / 前月\$8.80/Bu）と前月比\$0.32 下落。

4、大豆

① 生産量：	391百万ト	（前年比9.9%	増↑	、	前月比0.3%	増↑
② 消費量：	380百万ト	（前年比4.6%	増↑	、	前月比0.7%	増↑
③ 貿易量：	169百万ト	（前年比9.5%	増↑	、	前月比0.6%	増↑

④ 概況：世界生産量は、ARGで単収減から前月比微減したがBRAが史上最高の1.5億トを超える大豊作予想から、全体では前年比10%近い増産がほぼ確定。消費量は中国が相変わらず旺盛、貿易量も中国が1億トに迫る勢いで全体を押し上げている。期末在庫は102百万ト/在庫率26.9%。うちBRA31/ARG24百万トで半分以上を占める予想。

⑤ 価格：\$14.52/Bu（前年\$11.92/Bu / 前月\$13.67/Bu）と前月比\$0.85 上昇。

世界の穀物・大豆等の需給

2022年11月9日
米国農務省発表： 単位100万トン

主要穀物世界の需給							
		生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量	
全穀物	2020/21	2,725	3,543	488	2,741	801	
	2021/22	2,798	3,599	509	2,805	794	
	2022/23	10月	2,747	3,541	487	2,775	766
	2022/23	11月	2,746	3,540	487	2,777	763
小麦	2020/21	775	1,073	203	782	291	
	2021/22	779	1,070	203	794	276	
	2022/23	10月	782	1,058	208	790	268
	2022/23	11月	783	1,059	209	791	268
粗粒穀物 (とうもろこし等) 注1	2020/21	1,441	1,779	234	1,456	323	
	2021/22	1,503	1,826	250	1,492	335	
	2022/23	10月	1,460	1,794	226	1,467	327
	2022/23	11月	1,460	1,794	225	1,468	326
米	2020/21	509	691	51	503	188	
	2021/22	515	703	56	520	183	
	2022/23	10月	505	689	53	518	171
	2022/23	11月	504	687	53	518	169
大豆	2020/21	369	463	165	363	100	
	2021/22	356	456	154	361	95	
	2022/23	10月	391	483	169	380	103
	2022/23	11月	391	485	169	380	105

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	307.01	1,168.74	178.96	1,174.55	183.04	301.19
	11月	307.68	1,168.39	177.60	1,175.30	182.74	300.76
アメリカ	10月	34.98	352.95	1.27	304.81	54.61	29.77
	11月	34.98	353.84	1.27	305.45	54.61	30.02
アルゼンチン	10月	1.49	55.00	0.01	14.00	41.00	1.49
	11月	1.49	55.00	0.01	14.00	41.00	1.49
ブラジル	10月	4.95	126.00	1.30	77.00	47.00	8.25
	11月	4.95	126.00	1.30	77.00	47.00	8.25
EU	10月	9.96	56.20	20.00	76.10	2.70	7.36
	11月	9.96	54.80	20.00	74.70	2.70	7.36
日本	10月	1.38	0.01	15.00	15.00	0.00	1.39
	11月	1.38	0.01	15.00	15.00	0.00	1.39
中国	10月	209.24	274.00	18.00	295.00	0.02	206.22
	11月	209.14	274.00	18.00	295.00	0.02	206.12
ロシア	10月	0.93	15.00	0.05	11.20	4.00	0.78
	11月	0.93	15.00	0.05	11.20	4.00	0.78
ウクライナ	10月	4.57	31.50	0.00	10.70	15.50	9.87
	11月	4.57	31.50	0.00	10.70	15.50	9.87

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	92.38	390.99	166.23	380.24	168.84	100.52
	11月	94.67	390.53	166.28	380.17	169.14	102.17
アメリカ	10月	7.45	117.38	0.41	64.15	55.66	5.44
	11月	7.45	118.27	0.41	64.48	55.66	5.99
アルゼンチン	10月	23.15	51.00	4.80	47.75	7.00	24.20
	11月	23.90	49.50	4.80	47.00	7.20	24.00
ブラジル	10月	23.16	152.00	0.75	55.10	89.50	31.31
	11月	23.34	152.00	0.75	55.35	89.50	31.24
中国	10月	30.74	18.40	98.00	116.59	0.10	30.46
	11月	31.79	18.40	98.00	116.59	0.10	31.50
EU	10月	0.93	2.50	14.80	16.78	0.22	1.23
	11月	1.13	2.47	14.80	16.78	0.22	1.40

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	10月	276.01	781.70	203.86	790.17	208.33	267.54
	11月	276.31	782.68	202.59	791.17	208.65	267.82
アメリカ	10月	18.21	44.90	3.27	29.61	21.09	15.68
	11月	18.21	44.90	3.27	29.75	21.09	15.54
アルゼンチン	10月	2.03	17.50	0.01	6.25	12.00	1.28
	11月	2.08	15.50	0.01	6.15	10.00	1.43
オーストラリア	10月	3.50	33.00	0.20	8.55	25.00	3.15
	11月	3.50	34.50	0.20	8.55	26.00	3.65
カナダ	10月	3.67	35.00	0.60	9.10	26.00	4.17
	11月	3.67	35.00	0.60	9.10	26.00	4.17
EU	10月	13.43	134.75	5.50	108.75	35.00	9.93
	11月	13.43	134.30	6.00	109.25	35.00	9.48
中国	10月	141.76	138.00	9.50	144.00	0.90	144.36
	11月	141.76	138.00	9.50	144.00	0.90	144.36
インド	10月	19.50	103.00	0.03	104.50	6.50	11.53
	11月	19.50	103.00	0.03	104.00	6.50	12.03
ロシア	10月	11.09	91.00	0.30	45.00	42.00	15.39
	11月	11.09	91.00	0.30	45.00	42.00	15.39
ウクライナ	10月	5.81	20.50	0.10	10.70	11.00	4.71
	11月	5.81	20.50	0.10	10.70	11.00	4.71

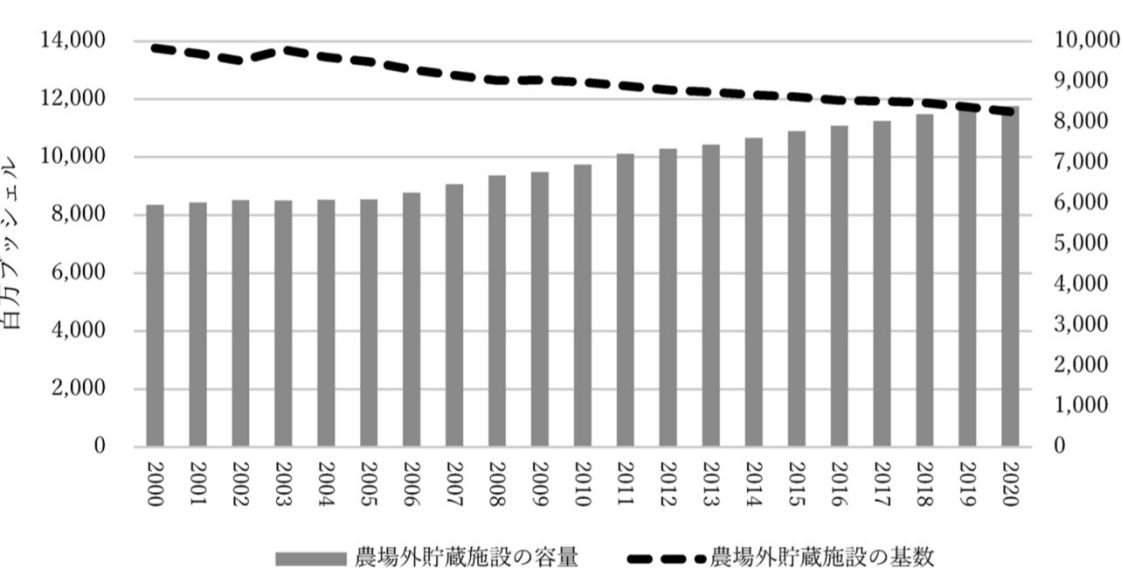
脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。

脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。

世界の食品産業と穀物需給(8)

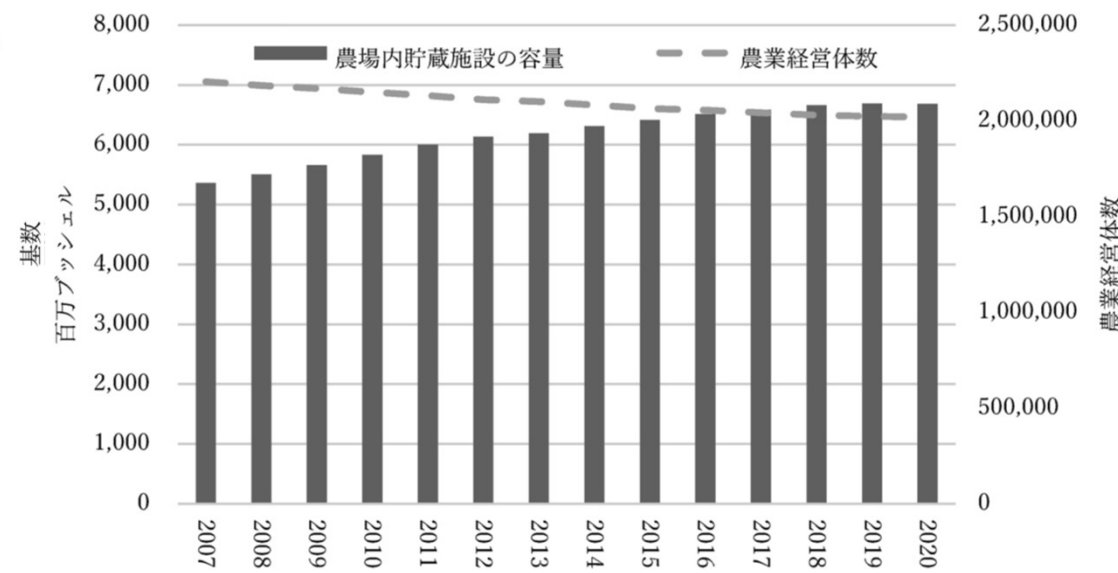
- ① 先月は、世界の穀物市場を席捲する「穀物メジャー」の食品産業「川下」である加工/販売/その他周辺事業への事業内容の深化の特徴と新たにこの市場に参入する企業群などについて述べたが、今回は世界最大の穀物生産/輸出国である米国に於ける穀物集荷業界の構造変化について触れたい。この内容については東京農大の研究が優れており参考にした。
- ② 穀物市場においては、その生産/流通/販売のプロセスの中で2000年代初頭までは収穫の佳境である9月以降、国内外需要に向けて一斉に販売される所謂「Harvest Pressure」が発生し市場価格が下落したが、近年その様相は大きく変化している。要するに、収穫時期を迎えても「Pressure」がかからない或いはそれが比較的弱いという現象である。その最大の要因は、米国において2000年以降穀物メジャーを中心に急速に穀物集荷/貯蔵施設規模が拡大したのと同時に農家保有貯蔵施設(On farm)も大きく増加したことが挙げられる。
- ③ [図1]は、USDA統計による2000-2020年までの20年間の穀物メジャー等の農場外貯蔵施設(Off farm)の数と貯蔵能力の変化を表したものである。これによると、この20年間に彼らの農外貯蔵施設数はおよそ16%減少(約1万基⇒8,400基)したが、逆に施設規模は大幅に約4割(82億bu⇒115億bu=2.9億ト)増加した。一方、この間の1基あたり施設規模は1.7倍(8百万bu⇒14百万bu=34千ト)と大規模化した。このことは要するに穀物メジャー等のOff farm施設のscrap & builtと拠点集約が急速に進んだことの証左と言える。しかしこの構造変化は、生産農家の大手集荷業者への販売が減少し逆に身近な生産拡大するエタノール工場と大手畜産企業への販売増加という物流上の構造的変化をもたらしている。(この具体的な動向については来月)
- ④ このような穀物メジャー等のOff farm貯蔵施設拡大と歩調を合わせ、[図2]に示す通り生産農家も2012-13年の相場高騰等により資金力を付けたことや穀物メジャー等の集荷貯蔵施設増強の動き等を背景としてそのOn farm貯蔵施設の拡大を進めている。このことにより生産農家は収穫期に束縛されることなく市場動向を見ながら販売先を選択する可能性が高まり、集荷業者やエタノール工場等に対する交渉力を高めていると言える。具体的には、農家経営体の定義を変更した2007年から2020年までの間、経営体数は約7%減少(215万戸⇒200万戸)、逆に貯蔵能力は21%増加(55億bu⇒67億bu=1.7億ト)と大きくその規模は拡大している。このOff farm+On farmの2020年時点に於ける両者の貯蔵規模合計は182億bu=4.6億トとなり、概略で2000年比約50億bu(132⇒182億bu)=1.3億ト増加し全体でも約4割近く拡大したことになる。
- ⑤ USDA2021Grain Stockによれば、穀物在庫量がピークに達すると思われる同年12/1の全米穀物実在庫数量は、On farm 91億bu=2.3億ト/Off farm 75億bu=1.9億ト/合計166億bu=4.2億トとトータル数量で言えば上記③④合計4.6億ト内にほぼ収まり、昨年の全米穀物生産量4.5億ト+大豆1.2億ト=合計5.7億トに対する貯蔵能力は81%、12/1実在庫比は110%となり充足率は極めて高い。ただし、On farm在庫が④の貯蔵能力を3割ほど超えているのは、野積や簡易貯蔵或いは流通在庫等の相当な数量が含まれていると推測されるが中身は検証する必要がある。一方、米国の期末在庫量/率は昨年度穀物全体で57百万ト/12.5%、大豆で7百万ト/6.1%と全世界穀物在庫794百万ト/28.3%、大豆95百万ト/26.1%と比べて極めて低いのが特徴である。これは米国の穀物の生産/流通/販売のプロセスが効率よくコントロールされていると言えるが、逆に一旦不作となれば供給削減/価格高騰と大混乱を招く危険性を孕んでいる。(続く)

【図1】農場外貯蔵施設(集荷業者の施設など)の数と容量の変化



出所:USDA, National Statistics Service, Grain Stocks

【図2】農場内貯蔵施設の容量と農業経営体数の推移



出所:USDA, National Statistics Service, Grain Stocks